方略能力研究に関する理論的背景

達 川 奎 三
広島大学外国語教育研究センター

はじめに

コミュニケーション能力がいくつかの下位構成素からできていることは諸学者が認めるところである。その下位構成要素の１つが「方略能力」であるが，それを支えるさまざまなコミュニケーション方略（communication strategies, 以下 CS）に関する研究についてはまだまだ解決しなければならない課題が多い。方略能力に関してはその指導重要性は認識されながらも，他の言語下位構成素（能力）と比べ，その研究手法を始め，測定・評価に関しては十分な合意が形成されていない，などの問題点もある。以下，方略能力に関わる基本的概念を整理するとともに，これまでの CS 研究における「定義」「分類方法」「検証方法」を中心にまとめてみたい。

１．外国語能力における方略能力の位置づけ

外国語能力における方略能力が，他の言語能力とどのように関連付けられているかを時系列的に整理してみる。（説明の都合上，一部前後している部分を含む。）

Chomsky（1965）：実際の言語使用である「言語運用（performance）」とそれを支える「言語能力（competence）」に区別した。言語能力とは無限の文を生成・理解する知識であるとする，いわゆる「生成文法」理論である。

Hymes（1967）：Chomsky の理論は理想的な話し手と聞き手を想定したものであると批判し，社会言語学的視点を取り入れる必要性を主張した。「言語運用（communicative performance）」と「伝達能力（communicative competence）」に区別し，後者は「言語知識（knowlegde）」「言語使用のための能力（ability for use）」から成るとした。なお，communicative competence という表現を初めて提唱したのは Hymes である。

Canale and Swain（1980）：伝達能力を「文法能力（grammatical competence）」「社会言語的能力（sociolinguistic comepetence）」「方略能力（strategic competence）」の３つに分類した。なお，方略能力を「言語運用上の諸問題や不十分な伝達能力に起因するコミュニケーションにおける挫折を修復する（to compensate for breakdowns in communication due to performance variables or to insufficient competence）力」と定義した（p.30）。

Canale（1983）：社会言語的能力に「談話能力（discourse competence）」を加えた。方略能力は文法能力，社会言語的能力，談話能力という３つの言語知識を関連付け，運用する能力と考えた。また，方略能力を補償的なストラテジーだけでなく，「目標言語の効果的な産出を促進する（to enhance the effectiveness of communication（e.g. deliberately slow and soft speech for

rhetorical effect）能力」とした（p.11）。

Savignon（1983）：Canale（1983）と前後して，コミュニケーション能力の下位構成要素を４つの能力に分け，以下のような図を示した。

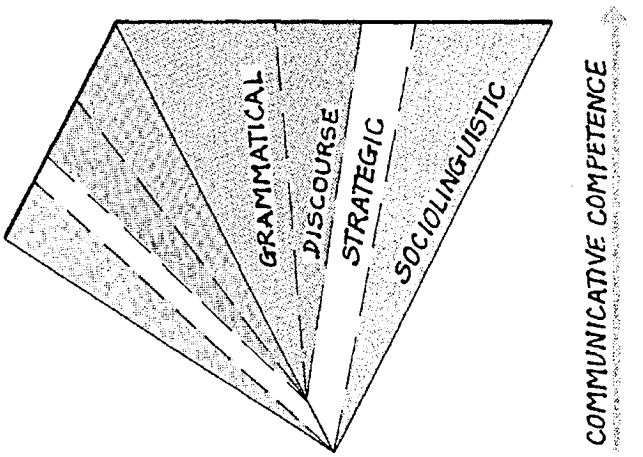

図１　Savignon（1983）のコミュニケーション能力仮説

（Savignon 1983: 46）

この仮説で重要なことは「方略能力は，伝達能力が向上するとともに他の３つの能力に比べてその相対的重要度は減じるが，どの段階でも存在している」という点である。我々はある言語に関してすべてを知るということは絶対にあり得ないことであるし，その時点で有している能力の範囲内で対処しているという事実を考えれば妥当な考え方だと言える。

> Strategic competence is present at all levels of proficiency although its importance in relation to the other components diminishes as knowledge of grammatical, sociolinguistic, and discourse rules increases. The inclusion of strategic competence as a component of communicative competence at all levels is important because it demonstrates that regardless of experience and level of proficiency one never knows *all* a language. The ability to cope within limitations is an ever present component of communicative competence. Whatever the relative importance of the various components at any given level of overall proficiency, it is important to keep in mind the *interactive* nature of their relationships. The whole of communicative competence is always something other than the simple sum of its parts. （p.46　下線は筆者）

Bachman（1990）：方略能力を言語使用に関する知識から独立させ，それらの知識を「運用する能力」と見なした。この仮説は後に続く Bachman and Palmer（1996）で発展をみるが，岡（2003：50）のように

CSをとらえるのに，不十分な言語能力をどのように埋め合わせするかという視点だけでは，効果的なコミュニケーションに結びつかない。最近ではもっと前向きにとらえ，どのようにしたらより効果的に意志伝達が達成されるのかという視点を重視する。とりわけ，異文化間コミュニケーションにおいて，相互理解が達成されるためには，相手との文化的違いに応じて，自分の意図を効果的に伝達しなければならない。そのような観点から見ると，Bachman（1990）の唱えるプロセスとしての方略的能力（strategic competence）が注目に値しよう

と評価する研究者も多い（神保 2003：88，岩井 2000；13など）。

Bachman and Palmer (1996)：方略能力を「メタ認知的」なものとして捉え，学習者の言語知識・性格・背景知識と作用し合いながら，コミュニケーションの目標設定・計画・実行を含む，言語使用に向かう行動過程を司る能力と捉えた。それ故，言語能力を「言語知識（Language knowledge）」と「方略的能力（Strategic competence）」に二分した。

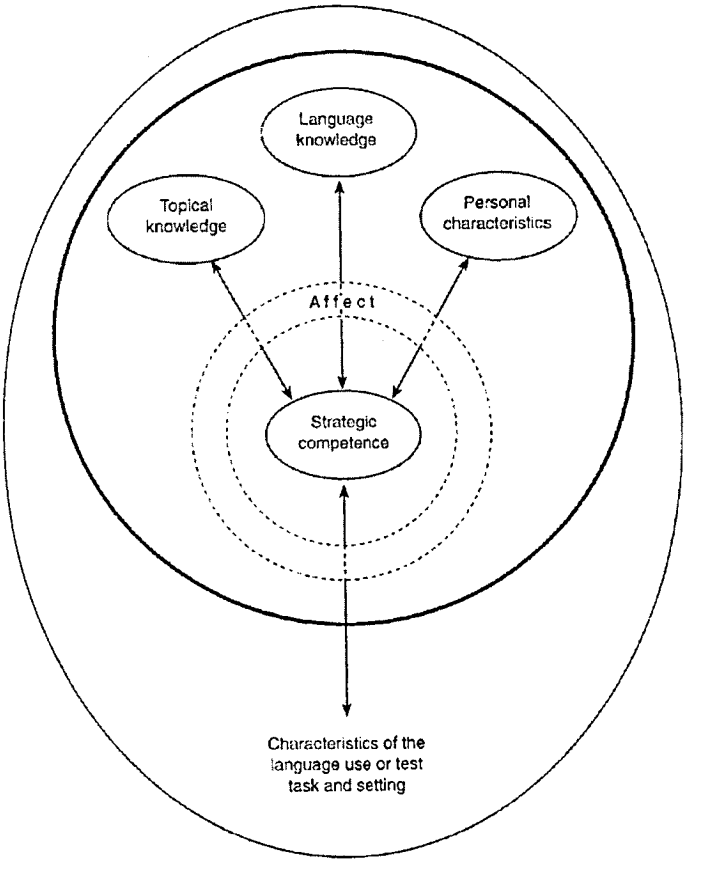

図2　Bachman and Palmer（1996）による言語使用能力仮説

(Bachman and Palmer 1996: 63)

表1　バックマンとパーマーによる言語能力の構成概念

言語能力（Language ability）
　言語知識（Language knowledge）
　　言語を構成するための知識（Organizational knowledge）
　　文法知識＝語彙，統語，音韻／書記（Grammatical knowledge）
　　テクストの知識＝結束性，修辞構造（Textual knowledge）
　　語用論的知識（Pragmatic knowledge）
　　言語機能の知識（Functional knowledge）
　　社会言語学的知識（Sociolinguistic knowledge）
　方略的能力（Strategic competence）
　　目標の設定（Goal setting）
　　評価（Assessment）
　　計画の立案（Planning）　　（Bachman and Palmer, 1996: 66-75）

Celce-Murcia, M., Zoltán Dörnyei, and Sarah Thurrell (1995)：Bachman and Palmer (1996) の少し前に教育への援用を重視した仮説を発表し，以下のような概念図を示した。

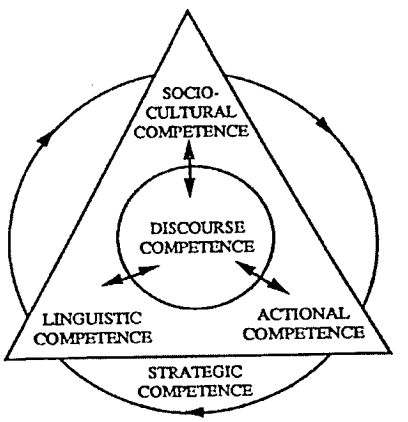

図3　Celce-Murcia, M., Zoltán Dörnyei, and Sarah Thurrell (1995) のコミュニケーション能力仮説

この論では談話能力を中心に据えており，言語的・社会文化的・機能的能力と相互作用をしながら，語レベルから文レベル，さらにまとまりのあるテクストである談話レベルまでの情報理解・産出する力と見なしている。

また，下図（次ページ）のように Canale らを意識した仮説の変化を示した。この論文では2つの能力の呼称に変化が見られる。1つは 'grammatical competence' に変えて 'linguistic competence' を用いている。この能力には「形態素」「統語」だけでなく「語彙」「音韻」的な要

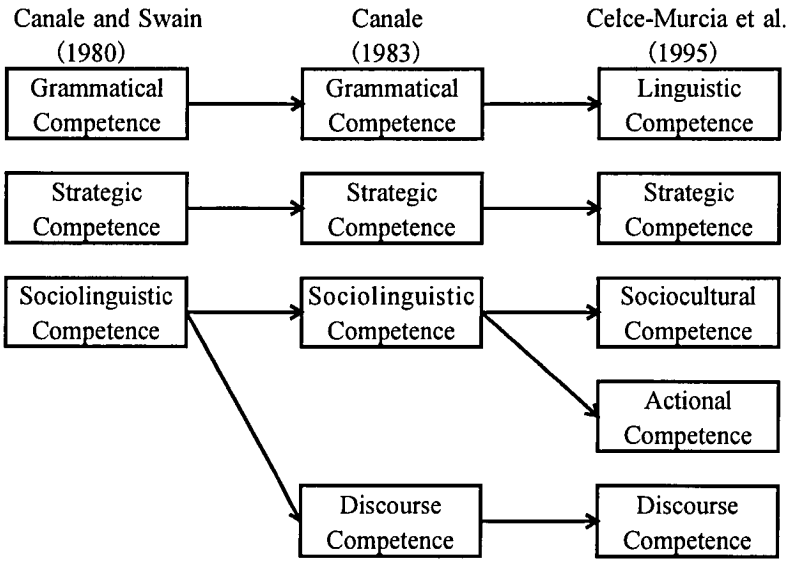

図4　Chronological Evolution of the Proposed Model

(Celce-Murcia, M., Zoltán Dörnyei, and Sarah Thurrell 1995: 11)

素も含まれており,「文法」という表現を使うことで生じる曖昧性を避けたいと考えたからである。もう1つは 'sociolinguistic competence' の代わりに 'sociocultural competence' を使い，社会言語学能力と機能的能力（actional competence）を区別した。彼女らは言語的・機能的・談話的な知識（resourses）をいかに適切に使うかが社会文化的能力だとした。

柳瀬（2006）の指摘するように仮説としての不備な点は見られるものの，後に続く Bachman and Palmer（1996）を意識したのであろうが，外国語教授・学習を念頭において構想した仮説であり，各下位構成能力を支える要素を具体的に詳述してある。この点で言語教師には極めて有益である。

例えば，方略能力を支える具体的な CS リストとして，以下のような項目（次ページ参照）を示しており，外国語教師にとっては実践的かつ示唆的である。何故なら次のような活用法が考えられるからである。

(1) 社会生活（とりわけ言語生活）における CS にはどのようなものがあるかを知る。
(2) 使用する教材では，どのような CS の使用場面が充実あるいは不十分であるかの点検リストとして活用する。
(3) (2) の情報に基づいてどのような CS を診断するのが妥当であるかの情報を得る。
(4) シラバスや教材開発においての点検リストとして活用する。
(5) 学習者に提示し，CS についての意識を高めたり，異文化理解教育に役立てる。

表2　Celce-Murcia, M., Zoltán Dörnyei, and Sarah Thurrell (1995) による CS リスト

AVOIDANCE or REDUCTION STRATEGIES
- Message replacement
- Topic avoidance
- Message abandonment

ACHIEVEMENT or COMPENSATORY STRATEGIES
- Circumlocution
- Approximation
- All-purpose words
- Non-linguistic means
- Restructuring
- Word-coinage
- Literal translation from L1
- Foreignizing
- Code-switching
- Retrieval

STALLING or TIME-GAINING STRATEGIES
- Fillers, hesitation devices and gambits
- Self and other-repetition

SELF-MONITORING STRATEGIES
- Self-initiated repair
- Self-rephrasing

INTERACTIONAL STRATEGIES
- Appeals for help
  - direct
  - indirect
- Meaning negotiation strategies

  Indicators of non/mis-understanding
  - Requests
    - repetition requests
    - clarification requests
    - confirmation requests
  - Expressions of non-understanding
    - verbal
    - non-verbal
  - Interpretive summary

  Responses
  - repetition, rephrasing, expansion, reduction, confirmation, rejection, repair

  Comprehension checks
    - whether the interlocutor can follow you
    - whether you said was correct or grammatical
    - whether the interlocutor is listening
    - whether the interlocutor can hear you

(Celce-Murcia et al. 1995: 28)

2．CS 研究の代表的アプローチ

CS 研究では1980年代を中心にその「定義」「分類方法」について激論が交わされ，その代表的なアプローチには次の３つがあるとされている（岩井 2000：21）。

1．相互作用を重視した定義
2．心理言語学的定義
3．プロセス指向の定義

それぞれについてその特徴を簡単に以下まとめてみる。

2.1. 相互作用を重視した定義

包括的な言語使用方略とは区別して，特化した意味での CS を最初に定義した Tarone et al. (1983)[1] などのアプローチである。彼女たちは CS 使用には次のような３つの条件が必要だとしている（pp.72-73）。

(1) 話し手が聞き手に何らかの意味を伝えたいと望んでいる。
(2) 話し手は意味を伝えるために必要な言語学的・社会言語学的枠組を持っていない，あるいは持っていても聞き手はそれらを共有していないと考えている。
(3) 話し手は以下のどちらかを選択する。
　(a) 回避，つまりその意味を伝えようとしない。
　(b) その意味を伝えるために別の方法で試してみる。そして話し手は聞き手と意味が共有されたと明確に思われた時点でそれらの試みを止める。

最初の２つの条件は話し手に足場を置いた一方向的な捉え方であり，３つ目は聞き手を含めた双方向，つまり相互作用を意識した捉え方をしようとしている。そして，CS の定義と分類方法については以下のような説明をしている。

CS とは，学習者が目標言語の話者と意志疎通を図ろうとする場合の，知っていることをどのように活用しているかのパターンを記述したものである。

(1) 言い換え（Paraphrasing）：
　近似的表現：正しくないとは承知しているが，話し手を満足させるのには十分な意味的特徴を共有する目標言語の単語や構文を使用すること。(e.g. *money* for *salary*)
　造語：表したい概念を伝えるために語を作り出すこと。(e.g. *airball* for *balloon*)
　遠回しな表現：適切な表現や構文を使う代わりに，その事物や行動の特徴や要素を描写すること。(e.g. *hot room for growing vegetables and flowers* for *greenhouse*)
(2) 借用（Borrowing）：
　直訳：単語ごとに母語で訳すこと。(e.g. *sweeping machine* for *vacuum cleaner*)
　言語切り替え：訳すことをせず，母語の表現をそのまま用いること。(e.g. He is always a *genki* boy.)
(3) 援助の要請（Appeal for assistance）：適切な表現を尋ねること。(e.g. "What is this?"

"What is it called?")

(4) 身振りの使用（Mime）：語彙表現を用いずに非言語的方略や行動を用いること。(e.g. clapping one's hands to illustrate applause)

(5) 回避（Avoidance）：

話題の回避：目標言語の表現や構文を知らない概念については，ただ単に話さないようにする。

メッセージの回避：ある概念について話し始めるが，続けることができなくなり，中途で止めること。

(Tarone, 1981: 286-287，表現の具体例は筆者による加筆を含む)

2.2. 心理言語学的アプローチ

相互作用を重視した定義と比べて，Færch & Kasper（1983）の定義は話者自身の内面的思考過程を重視し，「問題の発生所在」と「意識の関与」に注目したものと言える。第1点目の「問題の発生所在」であるが，発話を計画する段階（下図 Planning process）と実際に発話をしている段階（Execution）で問題が発生すればCSを使用するという主張である。また，2点目の「意識の関与」は，CSが「ある特定の言語使用者や状況においては意識的に使用されるが，別の言語使用者や状況においては無意識的に使用される」場合があると考えた点である。このような心理言語学的定義がCS研究で受け入れられるようになるのは，次に続く「プロセス指向のアプローチ」と関係がある。

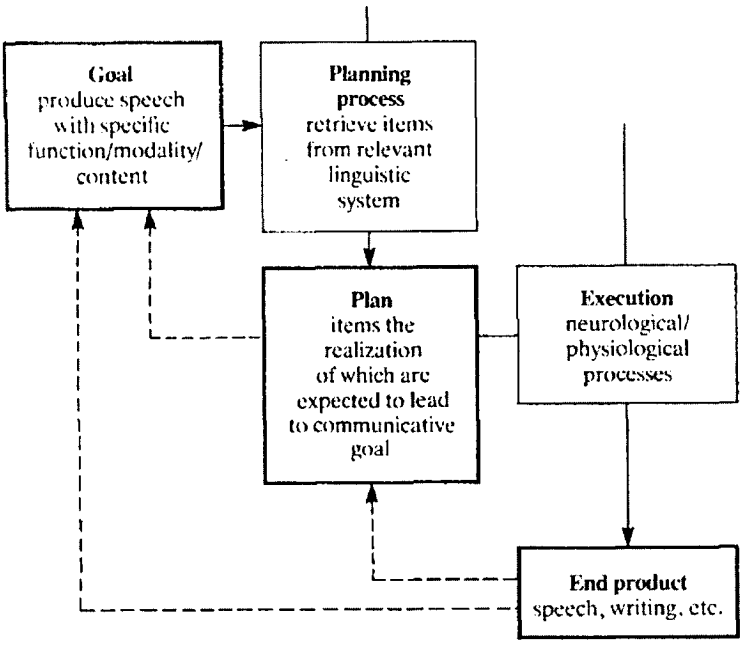

図5　Færch & Kasper（1983）によるCS使用モデル

(Færch & Kasper 1983: 25)

2.3. プロセス指向のアプローチ

プロセス指向の定義を論ずる時に必ず言及されるのが，オランダの研究者たちが中心となって行った Nijmegen Project であり，Poulisse（1990）などがあると岩井（2000）は紹介している。この研究では CS を「達成（履行）方略（achievement strategies）」に注目し，「語彙的問題（lexical problems）」のみに限定したことが特徴的である。Poulisse（1990）は数多くの CS 分類，とりわけ「達成（履行）方略」は，結局は表現しようとする「概念」と「言語知識」の「操作」が行われていると整理した点にその特徴があると考えられる。

表3　Nijmegen project のプロセス指向の定義

Archistrategies	CS types
Conceptual「概念」	Analytic
	Holistic
Linguistic「言語知識」	Transfer
	Morphological

Poulisse（1990: 109）に基づく

この定義は語彙に的を絞った「達成（履行）方略」を説明するには好都合であるが，談話レベルを意識した CS などには援用しにくい部分もあり，実際の言語使用とは異なるとの指摘もある（Tarone 1997）。

なお，中谷（2005）は「インタラクション派」と上記2，3のアプローチをまとめて「心理言語派」に大きく二分している。さらにこのような定義における揺れをまとめ整理した研究として，コミュニケーションの問題への対処を3つに分類した Dörnyei and Scott（1997）に言及している。

(1) 自己運用の問題：不適切な，または一部が不適切な自分の発話の問題に対する対処
(2) 話者間の問題：対話者との談話において，不適切な発話や互いの不理解によっておこる問題への対処
(3) 発話に要する時間の問題：目標言語で発話にかかる時間が引き起こすコミュニケーションのギャップを埋める

「インタラクション派」は（2）を重視し，「心理言語派」は（1）を重視したアプローチであると考えることができる。このような分類は CS の機能という視点からも説明されている。

(a) Psycholinguistic perspective: Communication strategies are verbal plans used by speakers to overcome problems in the planning and execution stages of reaching a communicative goal; e.g., avoiding trouble spots or compensating for not knowing a vocabulary item.

(b) Interactional perspective: Communication strategies involve appeals for help as well as other cooperative problem-solving behavior which occur after some problem has surfaced during the course of communication, that is, various types of negotiation of meaning and repair mechanisms.

(c) Communication continuity/maintenance perspective: Communication strategies are means of keeping the communication channel open in the face of communication difficulties, and playing for time to think and to make (alternative) speech plans.

(Celce-Murcia et al. 1995: 26)

2.4. 岩井（2000）の捉え方

岩井（2000）は「方略的能力は極めて抽象的な存在であり，それを伝達能力の各要素，話者の背景知識，心理面で具体化した個々の方略こそがCSであると位置づけるべきである」(p.112)と主張している。このようにコミュニケーションに必要な能力を理論化することで，伝統的CS研究で対象とされてきた語彙問題の解決に用いられるCSも，語彙レベル以外で用いられるCSやインタラクション上で必要になるCSも，この理論的枠組みの中ですべて把握することができると考えた。さらにBachman（1990: 85）のCLA（Communicative Language Ability）モデルを下敷きとして，伝統的CS研究や近年のCS研究が対象としてきた領域を具体的に示したのが下図である。

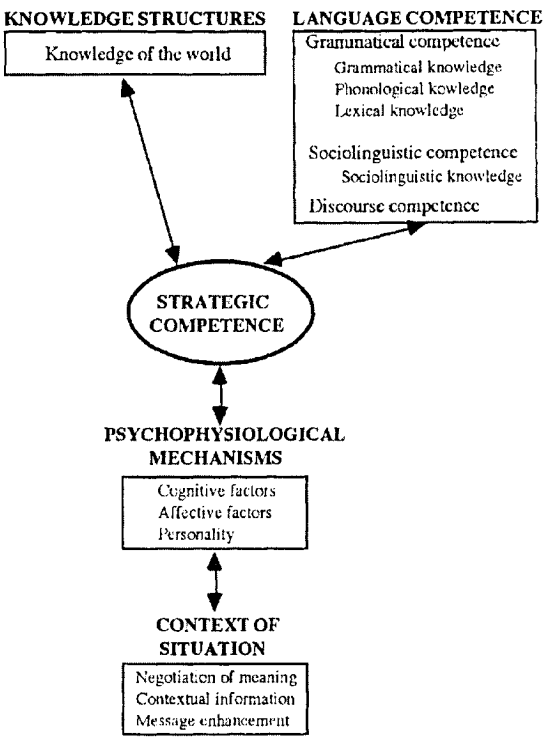

図6　Integrative Model of Dimensions and Structures Underlying CS Use

（岩井 2000：113）

さらに岩井は続け，

> 方略的能力がこのようにコミュニケーション全般に関わる包括的な能力であると考えれば，それは図に示しているあらゆる言語使用の能力（CLA）と有機的に連動しているととらえることができるであろう。事実，90年代になって行われたCS研究の多くは，CSが語彙以外の言語能力や心理的要因，あるいはインタラクション上で行われる意味の交渉などの過程でも使われるということを示しており，このように方略的能力を広義に解釈することが求められていると言える。（同掲書 p.112）

と今後のCS研究のあり方を提言しており，注目に値する。

2.5. その他のアプローチ

2.5.1. 言語学習方略研究での言及（捉え方）

さらに言語学習方略という視点からCSに触れているものにOxford（1990）があり，Direct Strategiesの1つとしてCompensation Strategiesを位置付けている。

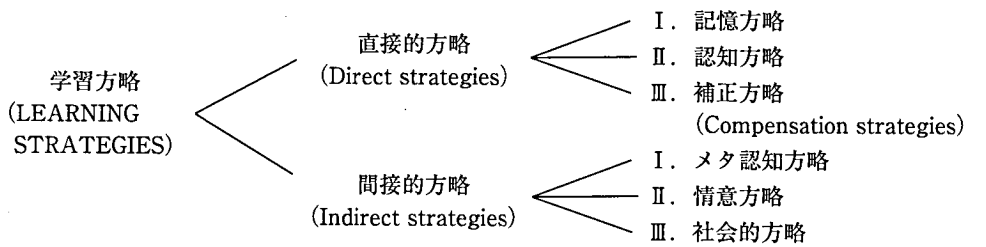

図7　Oxford（1990）による言語学習方略モデル

（p.16）

彼女は，補正方略とは「言語学習4技能すべてにおける知識の限界を乗り越えることを手助けする」とし，具体例として次のようなものを示している。（p.91）

A. 知的推論をすること（Guessing intelligently）
　1．言語的手がかりを使うこと（Using linguistic cues）
　2．その他の手がかりを使うこと（Using other cues）
B. 話したり書いたりする時に限界を乗り越えること（Overcoming limitations in speaking and writing）
　1．母語へ切り替えること（Switching to the mother tongue）
　2．援助を求めること（Getting help）
　3．動作やジェスチャーを使うこと（Using mime or gesture）
　4．部分的あるいは全体的な意志疎通を回避すること（Avoiding communication partially or totally）

5．話題を選択すること（Selecting the topic）
6．メッセージを調節したり近似的なものを用いること（Adjusting or approximating the message）
7．単語を作り出すこと（Coining words）
8．遠回しな説明や同意語を使うこと（Using a circumlocution or synonym）

2.5.2. 言語機能・シラバス研究での言及（捉え方）

Compensation strategiesについて，カリキュラム改革(curriculum reform)・試験問題の開発・教科書編集・教育課程編成（course design）などの際の指針として高い評価を得ている *Threshold Level 1990*（Council of Europe 1991）では，言語機能を大きく6つに分類し，その6つめとして‘Communication Repair（コミュニケーションの修復)’を示している。ここで同書の明細書リストに載せてある「コミュニケーションの修復」のための言語機能の内，代表的なものを示してみる。(ちなみに米山・松沢（1998：90）による *Threshold Level 1990*の日本語訳版では，Compensation strategies を「補償方略」としている。)

6.1. 理解できないことを合図する（signalling non-understanding）
6.1.1 Sorry, I don't understand.
6.2. 文の反復を求める（asking for repetition of sentence）
(I beg your) pardon? / What did you say, please? /
(Sorry) could you say that again (, please) ? / Could you repeat that, please?
6.3 語や句の反復を求める（asking for repetition of a word or phrase）
(文例・解説については省略。以下も同様)
6.4 話の確認を求める（asking for confirmation of text）
6.5 理解の確認を求める（asking for confirmation of understanding）
6.6 説明を求める（asking for clarification）
6.11 もっとゆっくり話すように頼む（asking someone to speak more slowly）
6.12 言い換える（paraphrasing）
6.13 言ったことを繰り返す（repeating what one has said）

ただし，上で言及した *Threshold Level 1990* の5つめの分類である「ディスコースを組み立てる」ための言語機能の中にも，CSと考えられるものがある。これは上で触れたBachman（1990），Bachman and Palmer（1996），Celce-Murcia et al.（1995）などのコミュニケーション仮説と相通じる部分がある。

5.2 ためらう（hesitating）
5.2.1 言葉を探す
er ... / ... you know ... / ... now let me think / ... just a moment /
... What's the word for it? / ... How shall I put it?
5.3. 自分の発言を訂正する（correcting oneself）
No ... / Sorry ... / I mean ... / That's not (exactly) what I meant to say. /

Let me try/start again. / or rather ... / that is to say ...

5.10 話題を変える（changing the theme）

something else ... / to change the subject ... / I'd like to say something else.

3．CS 使用の検証方法

外国語学習者の CS 使用について検証する際に，一般的によく用いられる手法には次のような手法がある。

1．観察により情報を得る方法
2．インタビュー調査により情報を得る方法
3．プロトコール分析により情報を得る方法
4．質問紙により情報を得る手法

それぞれについてその特徴を簡単に以下まとめてみる。

3.1. 観察により情報を得る方法

研究者が被験者の CS 使用についてその場で直接的，あるいはビデオなどの記録機器を用いて間接的に観察することにより情報を得る手法である。CS の詳細な把握は可能にはなるが，問題点としては結果が研究者の意図や期待に左右され主観的になりやすく，被験者の内面的意図や認知行動まで記述できない，などがあげられる。

3.2. インタビュー調査により情報を得る方法

被験者の CS 使用の意図などの情報を詳細かつ直接的に把握しようとする手法である。ただ，被験者の数が多いと時間やコストがかさみ，被験者の主観的な考えにデータ結果が影響されやすい，などの問題点もある。

3.3. プロトコール分析により情報を得る方法

自分の思考過程や行動について，CS 使用前・使用時・使用後に口述させることによって情報を得る手法である。問題点としては，本来の目的であるコミュニケーションを阻害してしまう可能性がある，などがあげられる。

中谷（2005）は Cohen and Olshtain（1993）の実験を引用しながら，CS 使用を含む会話場面を録画し，その VTR を見ることによって自らの行動を振り返り，考えや意図を口述させる手法の有効性を主張している。

3.4. 質問紙により情報を得る手法

質の良い質問項目や回答項目を準備できれば，時間的・コスト的にも信頼性の高い情報を得ることができるし，被験者の意識していない CS 使用についても探ることができる。この分野で評価の高いのが，Oxford（1990）による主張をもとに開発した The Strategy Inventory for Language Learning（SILL）であり，さらにオーラル・コミュニケーションに特化した質問紙としては Oral Communication Strategy Inventory（中谷 2005）などもある。しかしながら，被験者独自

のCS使用について詳細に把握することには不向きであり，得られた情報が実際のCS使用と必ずしも一致するわけでもない。

まとめてみると，どれ一つとして万能な手法はなく，研究の目的に添っていくつかを組み合わせるという考え方が妥当であると言える。

おわりに（CS研究における今後の課題）

岩井（2000：232-237）が言うように「研究がプロダクト指向からプロセス指向の研究へと発展したことで，CSを単なる第二言語使用の現象として片づけるのではなく，近年の応用言語学研究の理論的枠組みにそれを確実に位置づけることができた」と，まずは今日までの研究への知見に敬意を払うべきであろう。一方，第二言語学習者個人の性格，認知スタイル，言語習得や語学学習の経歴がCS使用にどのような影響をあたえるか，という課題はこれから解決されなければならない。それ故，方略能力の実態を探るためには，「相互作用を軸にして，対話者との関係でどのようなCS使用がなされるかを観察し，学習者の内的要因との関係で調べる」という，地道な作業を積み上げて行くことがＣＳ研究の前進には求められているのではなかろうか。

注

1）岩井（2000）によるとこの論文の初出は1976となっている。

参考文献

Bachman, L. F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing.* Oxford University Press.

Bachman, L. F. and A. S. Palmer (1996) *Language Testing in Practice: Designing and Developing Useful Tests.* Oxford University Press.

Bialystok, E. (1990) "Some Factors in the Selection and Implementation of Communication Strategies." In Færch, C, & G. Kasper (eds.) *Strategies in Interlanguage Communication.* Longman. pp.100-118.

Brown, G. and G. Yule (1983) *Teaching the Spoken Language.* Cambridge University Press.

Brown, Gillian. (1995) "Dimensions of Difficulty in Listening Comprehension." In Mendelsohn, D. J. & J. Rubin. *A Guide for the Teaching Second Language Listening.* Dominie Press, Inc.

Canale, M. (1983) "From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy." In J. C. Richards and Schmidt, R. W. (eds.) *Language and Communication.* Longman.

Celce-Murcia, M. (ed.) (1991) *Teaching English as a Second and Foreign Language.* Boston: Heinle & Heinle.

Celce-Murcia, M., Z Dörnyei, and S. Thurrell (1995) "Communicative Competence: A Pedagogically Motivated Model with Content Specifications." *Issues in Applied Linguistics,* 6 (2), 5-35.

Cohen, A. D. and E. Olshtain (1993) "The Production of Speech Acts by EFL Learners" *TESOL Quarterly,* 27, pp.33-56.

Coulthard, M (1985) *An Introduction to Discourse Analysis* (Second Edition). Longman.

Dörnyei, Z. and S. Thurrell (1992) *Conversation and Dialogues in Action.* Prentice Hall.

Dörnyei, Z. and M. L. Scott (1997) "Communication Strategies in a Second Language: Definitions and Taxonomies. *Language Learning*, 47, 173-210.

Ellis, R. "Communication Strategies and the Evaluation of Communicative Competence." *ELT Journal* 38(1), 39-44.

Færch, C. (1981) "Inferencing Procedures and Communication Strategies in Lexical Comprehension." Paper Rresented at BAAL Seminar on Interpretive Strategies in Language Learning. University of Lancaster, September 1981.

Færch, C. and G. Kasper (eds.) (1983) *Strategies in Interlanguage Communication.* Longman.

Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation." in P. Cole & J. L. Morgan (eds.) *Speech Acts. Syntax and Semantics.* 3, 41-58. New York: Academic Press.

Ilyin, D. (1976) *Ilyin Oral Interview.* Rowley, Mass.: Newbury House.

Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics.* Cambridge University Press.

Lynch, T. (1996) *Communication in the Language Classroom.* Oxford University Press.

McCarthy, M. (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers.* Cambridge University Press.

Nunan, D. (1991) *Lauguage Teaching Methodology.* New York: Prentice Hall.

Oxford, R. L. (1990) *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know.* Newbury House.

Poulisse, N. (in collaboration with T. Bongaerts and E. Kellerman.) (1990) *The Use of Compensatory Strategies by Dutch Learners of English.* Dordrent, Holland. Foris Publications.

Rixon, Shelgagh (1986) *Developing Listening Skills.* Modern English Publications.

Rost, M. (1990) *Listening in Language Learning.* London: Longman.

Rubin, J. (1994) "A Review of Second Language Listening Comprehension Research." *The Modern Language Journal* 78(2), 199-221.

Savignon, S. J. (1983) *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice.* Addison-Wesley.

Tarone, E. (1981) "Some Thoughts on the Notion of Communication Strategy." *TESOL Quarterly*, 15. 285-295.

Tarone, E., Cohen, D. A. and G. Dumas. (1983) "A closer look at some interlanguage terminology: A framework for communication strategies." In Færch, C. and G. Kasper (eds.) (1983) *Strategies in Interlanguage Communication.* Longman. 4-14.

Tatsukawa, K. (2007) "Measuring the Strategic Competence for EFL Learners —A Comparison Between Japanese High School and College Students—" *ARELE* 18, 全国英語教育学会 2007. (印刷中)

Thompson, Ian. (2001) "Japanese Speakers" in Swan, M. and B. Smith (eds.) *Learner English -A Teacher's Guide to Interference and Other Problems-.* Cambridge University Press

van Ek, J. A. and J. L. M. Trim. (1991) *Threshold Level 1990.* Council of Europe Publishing.

Vandergrift, L. (1999) "Facilitating Second Language Listening Comprehension: Acquiring Successful Strategies." *ELT Journal* 53(3), 168-176.

——— (2004) "Listening to learn or learning to listen?" *Annual Review of Applied Linguistics*

24, 3-25.
Wadden, P. (1992) *A Handbook for Teaching English at Japanese College and Universities.* Cambridge University Press.
岩井 千秋 (2000)『第二言語使用におけるコミュニケーション方略 *-Communication Strategies in the Use of Second Languages-*』広島：渓水社.
岡 秀夫 (2003)「コミュニケーション方略」小池生夫他（編）『応用言語学事典』 研究社 pp.49-50.
神保 尚武 (2003)「コミュニケーション能力」小池生夫他（編）『応用言語学事典』 研究社 p.88.
達川 奎三 (2000)「『コミュニケーション表略』は教科書でどのように扱われているか」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.30. pp.255-264.
達川 奎三 (2006)「コミュニケーション方略に関するテスト」田中正道（監修）野呂忠司・達川奎三・西本有逸（編）『これからの英語学力評価のあり方 —英語教師支援のために—』教育出版 pp.63-75.
達川 奎三 (2007)「日本人大学生の英語『方略能力』に関する一考察」『平成18年度広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部（文化教育開発関連領域）第55号(2) pp.217-224, 2007.
達川 奎三, 田中 正道, ジョー・ラウアー (2006)「英語学習者のための『方略的能力』テストの研究開発」『広島外国語教育研究』No.9, 1-17. 広島大学外国語教育研究センター.
中谷 安男(2005)『オーラル・コミュニケーション・ストラテジー研究 —積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と目指して—』開文社出版.
柳瀬 陽介 (2006)『第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察 —英語教育内容への指針—』広島：渓水社.
米山 朝二・松沢 伸二(訳) (1998)。「新しい英語教育への指針—中級学習者レベル「指導要領」—」(vanEk, J, A. and J. L, M. Trim. 1991. *Threshold 1990.*) 大修館書店.

ABSTRACT

The Theoretical Background of Communication Strategy Research

Keiso TATSUKAWA
Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

The aims of this article are to summarize the historical development of discussions on 'communicative competence' of language learners, focusing on 'strategic competence,' and also to explain different approaches to the study of communication strategies.

A lot of different ideas have been presented on the concept of communicative competence so far. However, it is agreed today that communicative competence of language learners consists of several major sub-components, one of which is strategic competence. The first part of this article chronologically summarizes eight influential ideas in the field, with the focus on strategic competence: Chomsky (1965), Hymes (1967), Canale and Swain (1980), Canale (1983), Savignon (1983), Bachman (1990), Bachman and Palmer (1996), and Celce-Murcia, M., Zoltán Dörnyei, and Sarah Thurrell (1995).

In the second half of this paper, it is shown how foreign language researchers and practitioners are paying more attention to nurturing learners' strategic competence, as communicative language teaching is widely accepted in classrooms. There are two major approaches within communication strategy studies: the interaction-focused approach and the psycholinguistic (process-focused) approach. In this paper, Iwai (2000)'s future research direction in the field of communication strategies is revisited.

Lastly, a brief summary is presented concerning how to collect data for communication strategy studies.